施工者に幸あれ 第87回

大地で育まれた底力
構造家・長谷川大輔

朝倉幸子◉TH-1
illustration:Taco

■大海を知らず

1974年に北海道の砂川で生まれ美唄で育つ。地方の名門高校にいる，勉強しなくても成績優秀な生徒のタイプだったろう。が，その岩見沢東高等学校を卒業して，すんなり合格できるほど国立大学は甘くなかった。「それでは東京の大学へ行こう」と一念発起（でもないが…）して，武蔵工業大学（現東京都市大学）の建築学科に席を置いたのだった。まったくと言えるほど建築に興味をもっていなかった。数字に強くて器用なのだからいいかもしれない程度の選択。「おばかさんだったのです」と学生時代を振り返る。「オフレコ」の前置き付きで，「競馬では食べていけないと思った」と笑いながらいえるほどの学生生活を送ったと語る楽しい人だ。大手設計事務所やアトリエ事務所で模型づくりのアルバイトとして活躍していたということも聞けば，「建築に興味ありませんでした」と斜に構えていうのは，ちょっと違うのかもしれない。

■修行時代

そのときの縁で金箱構造事務所に入社して6年間の血のにじむような修行。入所したときに自分の勉強不足を思い知ったから，よき先輩方に教えを請いながら技術を体得した。金箱事務所では規模や構造形式も違う5，6件の作品を同時進行で担当するからさまざまな実績を積めたのだ。表面上は，長谷川さんは一般にいう道産子的ともいえるおおらかな性格だ。所長の金箱温春さん（本コラム第28回に登場）の理路整然とした思考回路とは違いすぎます。今だから，合理性のある構造判断で設計するのを学べたことが「すごく役に立っている」といえるのだ。思いがけず出た感謝の言葉に覇志堂も，離れて知る親の有り難みのようなもの，と言いたそうな顔をしているのでした。

頭もいいうえに勉強熱心なエリートたちに囲まれて，「よい仕事をするには知識が必要なのだ」と思った長谷川さん。退所を決めたときに，漠然とだが大学院へ行こうと思っていたそうだ。けれど，それまで担当した建築家たちも「君は独立するのだろう?!」というし，ご祝儀で仕事も入って来たので独立した。まわりには今の活躍が見えていたのです。

■建築家とともに

ブロック造の建物OIM（2009年，設計／NIIZEKI STUDIO）は筆者の会社の施工で，長谷川大輔さんが構造設計者だった。施工管理した監督に聞くと，「冒険的建築で難しかった。だから構造家に頼るところも多かったが，施工の立場にも立った適切な指導をもらえた」とすこぶる評判がよい。北海道で育ち空間性の高い個性ある建物をつくり続けている，建築家の五十嵐淳さんと仕事をすることも多い。五十嵐さんが設計した旭川の住宅の内覧会で一日中案内をしている長谷川さんに会った。

構造設計者として来場者の質問に答えるひたむきな姿。特有の軽い言い回しは影を潜め，建築に熱い情熱を傾ける構造家がいたのでした。

五十嵐淳さんは「北海道や札幌をワクワクするような場に変化していくような，よきウイルスを発明して行きたい」と言っている。構造家・長谷川大輔さんは，世界へ発信できる建築家との協働でいかんなく力を発揮できる原点がここにある。

「構造設計者が建築家の設計に対してこうあるべきだと主張するのは好まない。スタイルをもたないようにするのが自分のスタイルです」という。が，ときには建築家に根本から見直すほうがいいと，提案もできるのが長谷川さんのスタイルなのです。